

# 「枇杷」

廣瀬清一 事務局

1 2月に入り、日本海側は突然大雪に見舞われた。そんな寒さの中、庭に出るとふと枇杷の花が目にとまった。

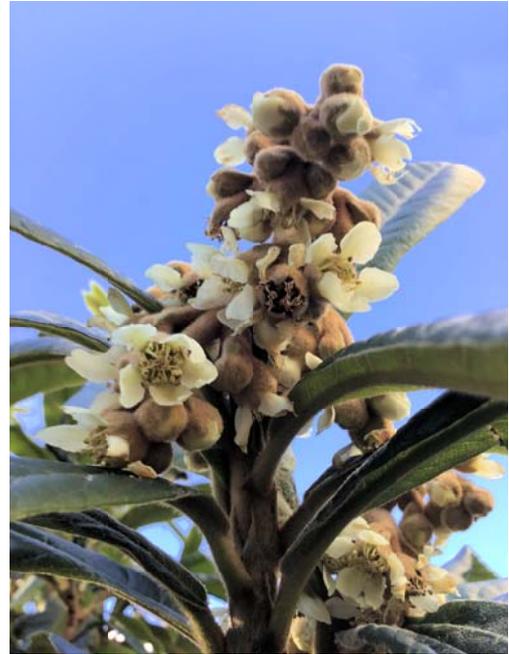
子供達が枇杷を食べた後、いたずらで庭の隅に捨てた種が育ち2階の屋根に届くまでになっていた。手入れをしなかったので高いところに実を付けて、結局食べごろになるとちゃっかり鳥たちがついばんでいく。そのおこぼれを5, 6個頂いていた。茂木の枇杷の種だったので、味はなかなか美味しい。

そこでここ数年は、自分で剪定をして枝を低めへと誘導してきた。

その結果、間近に咲いた花を見ることができた。枝先のほうに、ふんわりとやわらかな細かな茶色の毛に包まれた蕾が、寒さを避けるように房状に固まって付いている。

その中に、ところどころにクリーム色を帯びた白い5弁の小さな花がちらほらと咲いている。

これから2月に掛けて少しずつ咲かせていくようだ。この寒い冬に受粉を助けてくれる昆虫への枇杷の優しい気配りかもしれない。



枇杷の花

匂いを嗅いでみたら意外にいい匂いなのには驚いた。

強くないが甘いフローラルの香りの中に、軽くアニス、アーモンド、シナモンのニュアンスが感じられる。枇杷の実の味に似て心がほのぼのとする優しい香りである。

香りのメイン成分としては、Anisaldehyde、Nitroethylbenzene (powerful sweet-floral, warm-spicy odor reminiscent of cinnamon)、Methyl anisate の3成分が甘いフローラルで、他に

Methyl cinnamate、Benzaldehyde、Phenylethanol、Benzyl Cyanide などがの成分が載っている<sup>1)</sup>。

さて、植物の「枇杷」の名は、枇杷の実の形が楽器の「琵琶(古くは「比巴」「枇杷」とも表記されていた)」に似ていることから名付けられたとある。自然にある植物が先でなく、人が作った楽器の名前を借りたという経緯が、普通とは逆で面白い。



枇杷の学名は *Eriobotrya japonica* で、ギリシャ語の *erion* (軟毛) と *botrys* (葡萄) からなる。表面が白い軟毛で覆われた実が、葡萄のような房状になることから付けられている。

ところで、枇杷の原産地は中国南西部とある。一方、実の小さい野生種の枇杷が西日本を中心にあったとされる。しかし、これはあまり食されていなかったようだ。

日本で枇杷の栽培が本格的に行われるようになったのは、中国から持ち込まれた「唐枇杷」の種子を三浦シオが貰い受け、茂木の庭にまき、そこから広まったといわれている。

枇杷は5、6月を旬とする初夏のフルーツで、最近では大玉の高級品種、そして種なし枇杷も出回っている。

枇杷の木は、成長すると10mを超える大木となる。そんなこともあり「庭に植えると病人が出る」とか「庭に実のなる木を植えると縁起が悪い」といった迷信がある。

この迷信のもとをたどると、中国の古い言い伝えでは、枇杷は薬として利用されていた。枇杷の葉を求めて病人たちが列をなし、さらに病人が来て病気がうつる、そして次第に縁起が悪いとまで言われるようになったとある。



「寺岡平右衛門 中村歌右衛門」  
歌川国貞 一部分

古い仏教経典「大般涅槃經 (だいはつねはんぎょう)」には、枇杷の木は「大薬王樹 (だいやくおうじゅ)」、枇杷の葉は「無憂扇 (むゆうせん)」と呼ばれ大変すぐれた薬効を持っていると記されている<sup>3)</sup>。

江戸時代には、枇杷の葉に藿香(かつこう)、木香、呉茱萸(ごしゅゆ)、肉桂、甘草、莪朮(がじゅつ)などの生薬を配合した「琵琶葉湯」が暑気払いに用いられた<sup>3)</sup>。

この「枇杷葉湯」は京都烏丸を発祥として全国に広まり、江戸の地では庶民の夏の飲み物として重宝された。「枇杷葉湯売り」は、茶釜・茶碗などを入れた長方形の箱を天秤棒で担いで、往来で煎じて飲ませていた。

中国の古い医学書には枇杷は葉の他に種子、花、根などの利用についても記載があるようだが、農林水産省は「枇杷の種子の粉末は食べないように」と呼びかけている。

#### 参考文献

- 1) Yasumasa Kuwahara, Yayoi Ichiki et al  
(2-Nitroethyl)benzene: a major flower scent from the Japanese loquat *Eriobotrya japonica* [Rosales: rosaceae]. *Biosci Biotech Biochem.* 2014;78:1320-1323
- 2) 柳宗民 「くだものとや野菜の本」 講談社
- 3) 鈴木和重 大薬王樹「ビワ」 養命酒中央研究所 HP <https://www.yomeishu.co.jp/genkigenki/crudem/140528/index.html>